

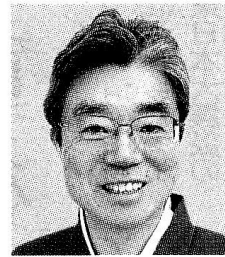
朝をひらく

息子が凶を引いた。「元祖おみくじ」とされる元三大師みくじの15番凶である。「眠っている間に、玉を取られた龍に似て情けない限りだ」とある。彼の今の心境を見事に物語っている。

ちゃんと卒論が仕上がるのだろうか。3月から始まる1年間の本山禅修行はさぞかしたいへんだらうな。心ここにあらず。不安と恐れに乗っ取られた人の心理状態を、新年のみくじは表した。
真国寺所蔵の元三大師みくじ

凶は、ありがたし

永田 円了
真国寺住職



には、凶が3割もある。新年早々凶は引きたくない。できれば大吉を、と願う気持ちは皆同じ。でもそうはうまくいかない。10人の内3人に凶がでる確率なのである。では、凶はそんなに不吉なものなのか？

100番凶には、侍が裸足で琴を担いで山道を歩いている姿と漢詩が書かれている。「世の中に失望し山奥に入る。大事な

琴だけをもつて。たとえ隠者として山に住んだとしても、そこでよい指導者に巡り合わなければ……」

すべてを失いかけたとしても、これだけは失いたくないもの、それは何か？ 世間の目にかき乱されることなく、内なる目をもち、師を求めよ。うん、これはなんといいありがたいメッセージだろうか。

ちなみに9番大吉は、「あれもこれも望み通りとなり、まさに時節が到来」。大吉は、ただうれしく舞い上がるだけ。これでは何も学べない。チベットのこたわぎを思い出す。「二つの道があるとき、難しい方を選べば

最良の君が引き出される」と。

そもそも、おみくじとは何なんだらうか。大吉か凶かで一喜一憂するためのものではないだらう。私たちの思考が既知の世界で堂々巡りを始めたとき、未知の世界からズドンと降りてくるメッセージとして捉えるなら、そこに何かハッとさせるものを感じる。

悲しいかな、人間の思考パターンは習慣に根付いた繰り返しを重ねる。ああ、またやっちゃった。また同じスタイルの年賀状だ。そんなとき、思考を離れたどこか遠くからのコトバは斬新で胸に響く。特に凶のメッセージは鋭い。

息子よ、心の軸足をどこに置くのか？ あえて難しい選択肢を選ぶ覚悟はあるのか？ 最良の君を引き出すために。

胸に響くメッセージ